

「外に出て花が見たい」

～本人の思いに寄り添い,BPSDの軽減を目指して～

高久律子

【はじめに】

認知症患者に対し,混乱を防ぐ介入や散歩を導入した結果,BPSDに軽減がみられたため,報告する.尚,本人と当院倫理委員会より同意は得ている.

【症例紹介】

90代女性,診断名:混合型認知症(AD+DLB),現病歴:X-3年 火の不始末や幻視出現,X-1年 被毒妄想訴え,夜間徘徊や近隣のチャイムを鳴らし,当院入院.

【初期評価】

HDS-R:5点,N-ADL:27点,NMスケール:15点,DBDスケール:22点

興味関心チェックリストより,散歩に興味示し,「外に出て花が見たい」との発言あり.

作業療法中(以下OT)は,「私ここに居ていいの?」といった発言や自身の塗り絵に対し,ネガティブな表出あり.病棟では徘徊みられ,「嫌になっちゃった」「外に出たい」「帰りたい」といった発言聞かれる.スタッフに訴える際,失語により,換語困難となることあり.

失見当,失認や判断力低下により作業が上手くできない事,生活範囲の狭小化や失語によるもどかしさなどから不安や不満,混乱に繋がり,徘徊が生じている.

【目標】

ネガティブな表出や徘徊が減少し,落ち着いて過ごせるようになる.

【治療方法】

①能力に適した作業の提供②ポジティブフィードバック(以下PF)③散歩

【経過】

塗り絵は構成が簡易なものであれば理解可能.完成時にPFを行った結果,作品を笑顔で肯定的に捉えられるようになった.散歩は,草花のある中庭で行い,花を見て笑顔で感想を述べたり,自ら植物に触れたりしていた.導入後,病棟内での徘徊が減少した.

【最終評価】

(変化項目)HDS-R:6点,N-ADL:29点,DBDスケール:13点

【考察】

混乱を防ぐ介入により,落ち着いて作業が行え,成功体験や受容される体験を多く積んだことで,肯定的な反応を示すようになったと考えられる.また,散歩により,閉鎖的空間から屋外に出ることで解放感や好きな植物を見られたことで満足感が得られ,心理的な安定が図れ,徘徊が減少したのではないかと考える.